―中毒病因論的研究を中心として　辰野　高司
三　京のオランダ・海老屋　片桐　一男

洋学史学会・日本薬史学会・日本医史学会

宗田一先生合同追悼会　第一部　（司会　小曽戸　洋）

開会の辞　酒井　シヅ
宗田先生の経歴と業績　長門谷洋治
宗田先生を偲んで　大塚　恭男
宗田先生の思い出　青木　允夫

宗田一先生合同追悼会　第二部　（司会　小曽戸　洋）

順天堂大学有山記念館地下食堂

挨　拶　日本医史学会理事長　蒲原　宏
洋学史学会会長　石山　洋
日本薬史学会会長　柴田　承二
献　杯　日本医史学会常任理事　杉立　義一

十一月例会　平成八年十一月十六日（土）

順天堂大学医学部八号館三階会議室

一　足立長雋の家系と年譜考　石原　力
二　アメリカと日本におけるヘボン　大滝　紀雄

一月例会　平成九年一月十八日（土）

順天堂大学医学部九号館八番教室

一　懸田克躬先生のこと　岡田　靖雄
二　ビデオ供覧『医真菌学の歴史を訪ねて――太田正雄と真菌研究――』

例会抄録

アメリカと日本におけるヘボン

大滝紀雄

私は平成八年夏、明治学院大学、関東学院大学、横浜指路教会、共立学園の職員らと共にヘボン・ブラウン研修北米七日間の旅に参加した。ニューヨーク着後、イーストオレンジ、プリンストン大学、スプリングフィールド、アムハースト大学、アルバニー、オーバーン、ロチェスターの大学などをめぐり、ヘボンとブラウンの墓参、内村鑑三、新島襄、クラーク、テンニー等の跡を訪ねた。

日本ではヘボンの名はかなり有名で、ヘボンが宣教師兼医師でありヘボン式ローマ字の考案者、和英語林集成の編纂者、聖書の翻訳者であることが一般に知られている。更に詳しい人は彼が指路教会の創始者であり、明治学院の初代総理であったことまでも知っている。

これに反して彼の生国であるアメリカではヘボンの名はあまり知られていない。私はニューヨークの西、車で三―四十分の距離にあるニュージャージー州のイーストオレンジ市にあるロースデール墓地を訪れた。ここにはヘボン夫妻の墓の

ほかに、昭和六十二年、明治学院一一〇周年記念行事の一環として建てられたアフリカ産の黒御影石の湾曲した横幅約二メートルの碑に彼の業績が記されている。なおニューヨークで生まれ、幼くして死んだ五歳と三歳と一歳の男児の小さな墓碑は哀れを催した。私たちを案内してくれたニューヨーク在住六年の日本人バスガイドに聞いてみると、このロースデール墓地には何度も来ているが、ヘボンの名も知らなければ、そんな立派な人がいたことは今日まで知らなかったということだった。また途中で何人かの米人に聞いてみたが、墓地は知っているが、ヘボンの名を知らないのが普通だった。これに反して、スプリングフィールド、マンソン、アムハースト大学、オワレス湖などではブラウンの名は有名で、土地の人は宣教師ブラウンを誇りにしていた。

私はどうしてこのような差があるのかと考えてみたが、その理由は高谷道男の研究の成果とその発表能力であると思う。『ヘボンの手紙』（弟スレーター・ヘップバーン宛のいわば私的な手紙集）『ヘボン書簡集』（ヘボンがミッション本部へ送ったいわば公的な書簡集）の序文などを読むと彼の研究努力と幸運が重なったことが知れる。なお高谷コレクションの大部分は現在明治学院大学と横浜開港資料館に収蔵されている。

アメリカではイーストオレンジ市にヘボンが晩年長老となって通い、かつ彼の葬儀が行なわれた赤れんが造りのブリック長老教会が現存している。プリンストン大学にはヘボンが九十歳の誕生日に日本政府から贈られた勲三等旭日章と勲記その他が大切に保管されている。火災にあった生誕地ミルトンと十三年間開業していたニューヨーク市には長老教会以外ほとんど見るべきものがない様である。

James Curtis Hepburn 一八一五―一九一一

祖先はスコットランドの名門であった。英国国教会の弾圧を恐れて、アイルランドに移住した。その後米国ペンシルベニア州に移動した。すなわちスコッチアイリッシュである。ヘボンの父サムエルはプリンストン大学法学部に学び、ミルトンに住み、弁護士であった。長男がヘボンで、弟がスレーターで二人は仲が良かった。

ヘボンは一八一五年三月十三日ミルトンで生まれ、ハイスクールに学び、カークパトリックという優れた教師の感化を受けた。化学の勉強が好きだったが、プリンストン大学で校長グリーン博士から古典、ギリシャ語、ラテン語、ヘブライ語の必要なことを学んだ。これがのちに聖書翻訳に役立ち、日本語と中国語をマスターできたことと思われる。

一八三二年プリンストン大学を卒業して文学士の資格を得た。同年ペンシルベニア大学医学部に学び、アポプレキシー（脳卒中）の論文で医学博士の学位を得た。一八三八年二十三歳ノリスタウンで開業し、クララ・メリー・リートに出会い大いに共鳴した。一八四〇年結婚。シャムへ出発する予定が果たせず、一八四一年三月二十六歳ポトマック号という捕鯨船でボストンを出発、大西洋、喜望峰、インド洋を経てシンガポールに着いたのは七月であった。阿片戦争のため二年間

ここにとどまり、中国語の研究と伝道をすることにした。ギュツラフの和訳『ヨハネ福音伝』の発見とブラウン夫妻に会ったのがシンガポールにおける二大収穫であった。ブラウンとはその後四十年の交友があり、二十年間日本で一緒に伝道および新約聖書の翻訳をすることになった。これは日本のプロテスタント伝道にとっても誠に貴重なものであった。

ヘボン夫妻はシンガポールに二年間滞在中に長男が生まれたが夭折した。マカオにしばらくとどまった後、一八四三年秋アモイの対岸コロンス島に行き、カミング宣教医と共に医療と伝道に尽くした。この時の経験が後に日本へ来たときの役に立った。ほかの子供は皆幼くて死んだが、一八四四年アモイで生まれた次男サムエルだけは長生きをした。アモイには約二年間滞在したが、サムエルを連れて一八四六年五年ぶりでアメリカへ帰った。

ニューヨーク四二番街で開業した。当時は一四番地までが市の中心部で、それ以外は郊外であった。最初はささやかな医院であったが、次第に発展して大きな病院となった。別荘も持ち何不自由なく十三年を過ごした。アジアコレラが流行したとき名を上げた。不幸なことにニューヨーク時代三人の男の子を失い、彼は暇を見ては墓参した。

ヘボンの来日

一八五三年七月八日（嘉永六・六・三）ペリー提督は大統領フィルモアの国書を携え艦隊四隻を従え浦賀に来航、七月には久里浜に上陸して、親書を手渡した。翌一八五四年三月三十一日（嘉永七・三・三）日米和親条約（神奈川条約）がペリーと林大学頭の間で調印された。調印の場所は横浜開港資料館のあたり玉楠の木の付近である。さらに四年後の一八五八年七月二十九日（安政五・六・十九）江戸小柴沖の米艦ポーハタン号上でハリスと井上信濃頭と岩瀬忠震との間で、日米修好通商条約が結ばれた。十四条中の八条に「日本にあるアメリカ人、日本人の堂営を毀傷することなく、また決して日本神仏の礼拝を妨げ、神体仏像を毀る事あるべからず。双方の人民、互に宗旨に付いての論争あるべからず…」

このニュースをニューヨークで聞いたヘボンは矢も楯もたまらず、日本へ伝道に行きたいと思った。「汝行きて万国の民に福音を与えよ」という天の声を聞いたといわれる。米国長老教会から日本派遣宣教医の許可が与えられた。ヘボンは病院、邸宅、別荘、その他家財道具一切を売却、サムエルと老父を残し、夫人と二人で一八五九年（安政六）四月二十四日ニューヨークを出発。コースは前回と同様、大西洋を横切り、アフリカ南端を通りインド洋を経て八月上海へ着いた。ここに約一か月とどまった。長崎に立ち寄り神奈川へ着いたのは十月十七日。二年後の一八六一年（文久元）宗興寺で四月から九月まで診療をした。

わずか五か月だったが、患者は一日一〇〇人にも達した。三五〇〇人の患者に処方箋を書いた。眼科手術三十四回、脳水腫、白内障、痔瘻、チフス、コレラなど。診療所の閉鎖、夫人が暴漢に打たれ帰国するなどのハプニングがあったが、

ヘボンは動ぜず、語学の研究、和英辞書の編纂、聖書の翻訳を続行した。幕府から大村益次郎ら九人の委託生がヘボンの下で研鑽した。大村は二年間江戸から往復五〇キロを馬で通った。

居留地三九番館へは一八六二年十二月に移転した。物情騒然としていたが、長崎中心が今は横浜中心に変わっていた。一八五九年横浜へ来た福沢諭吉は英語一色の横浜を見て驚いた。一八六三年開いたヘボン塾には高橋是清、林董、三宅秀らが学んだ。夫人もアメリカから帰ってきた。朝五時起床、三十分散歩。九時から診療を始め、二〇―五〇人の患者を診察。全部施療で患者からは一銭も料金を取らなかったが、中には江戸から来る金持ちもあったようである。眼科が得意で眼科患者が多かった。皮肉なことにヘボン自身眼病に悩んでいたことが日記や手紙に記されている。五人の医学生がいたようだが詳細は不明。当時は梅毒、結核、胃病などが多かった。三代目沢村田之助の脱疽手術にはアメリカからセルフォの義足を取り寄せ、我が国最初の義足の装着をしたのは有名だ。岸田吟香には精錡水（硫酸亜鉛点眼薬）の処方を教えた。午後は著述に専念した。

『和英語林集成』第一版は一八六七年（慶応三）語数二万語、岸田吟香とともに前年上海に赴き出版。出版までに七年を経過し、日本語の教師を五回変えたといわれる。岸田は書名を最初『詞林集成』と考えたが、『語林集成』に訂正し一厘値上げしたと述べている。吟香の手助けは勿論あったが、細部はほとんどヘボン一人で完成したらしい。米国長老教会は辞書は直接伝道に関係なしとして、出版援助を断った。ウオルシ・ホール商会が援助の手を差し伸べた。しかし発行後の売れ行きは予定をはるかに上回った。

第二版は一八七二年（明治五）上海で出版、七千語が追加され、奥野昌綱が助手となり手伝った。第三版は明治十九年出版。一万語が増補され、高橋五郎が助手として働いた。この版権を丸善に譲り二〇〇〇ドルを得たが、その全てを芝白金の明治学院に寄付した。この寄付金で建てられたヘボン館は不思議なことに、明治四十四年ヘボン永眠の日、時を同じうして焼失してしまった。『和英語林集成』はその後七版まで印刷され、ローマ字と英語だけのコンサイズ型の縮刷版はアメリカで二版まで出版された。

新約聖書の翻訳。翻訳者はSRブラウン、DCグリーン、RSマクレー、JCヘボンの四名で一八七四年より約六年かかり、ギリシャ語の知識を必要とした。

旧約聖書の翻訳。翻訳者はGFフルベッキ、PKファイソン、JCヘボンの三名で一八八二年より約五年かかり、ヘブライ語の知識を必要とした。

横浜におけるヘボンの足跡

1　神奈川の成仏寺　神奈川区本町にあり、JR東神奈川駅から十分、ヘボン、ブラウンらが来日早々住んだところで

「史跡外国宣教師宿舎跡」の碑が建っている。

2　神奈川の宋興寺　神奈川区幸ヶ谷にあり、シモンズの宿舎　ヘボン施療所となった。最近整備され、ヘボン博士顕彰会で建てられた石碑がある。

3　居留地三九番跡　中区山下町、テレビ神奈川の隣、法務省横浜合同庁舎前　ヘボン診療所、夫人の英学塾、ヘボンが20年住み、出版、翻訳、教会設立準備場所

4　ヘボン最後の居住地　港の見える丘公園から大仏次郎記念館を過ぎ、韓国領事館を右折したところに「ヘボン山手家族寮」がある。ヘボンが十年住んだ居住地で、聖書の翻訳をしたり明治学院へ通ったところである。門柱のプレートにその旨が記されている。

5　明治学院戸塚キャンパスのヘボン胸像　白金の明治学院原型から製作したもので平成四年除幕式。

6　福浦の横浜市立大学部情報センター入口　沢村田之助に義足を装着する様子を信楽焼きの陶板に描いた美しい浮世絵が飾られている。

7　指路教会　中区尾上町六丁目ヘボンが最後に関与した教会、米国の母教会　Shiloh Churchから取った名で「シロ」は「平和の主」の意味である。一八九〇年（明治二十三）十月定礎式。一八九二年六月教会献堂式。十月十五日同教会でヘボン夫婦送別会。ヘボンは前半は日本語で、後半は英語で挨拶。三十三年前ニューヨークを出発したときより今日日本を離れるほうがはるかに辛いという意味を述べた。十月二十二日ゲーリック号で横浜出帆、帰国の途につく。

高谷道男著　人物叢書『ヘボン』によれば、「眼科医であったヘボンは、施療によって日本人の肉眼を開き、辞書によって日本人の知識の眼を開き、聖書の翻訳によって、日本人の霊性の眼を開いた」と述べている。

（平成八年十一月例会）

江馬式蒸気風呂と薬草

中西淳朗

美濃大垣の蘭方医・江馬蘭斉は、十八世紀に蘭書バルベッティ・アベリウスよりヒントを得て蒸気風呂を考案し、梅毒の治療に使用したと伝えられている。養子の元弘松斉が文政から天保年間にかけて、両国薬研堀に江馬式蒸気風呂を作り、門人の神田紺屋町の荻野立斉に使用法を教えて開業せしめたという。

このような話が大垣に残っている割に、この風呂のことは関東ではあまり知られていない。

この風呂の全体外観図は、藤浪剛一氏の『東西沐浴史話』の口絵に収載されている。構造は酒樽の蓋をぬき、さかさに互いに組み立てた三段重ねの円柱状の湯槽となっている。一番下の樽が五右衛門釜の上にのる形になっており、そこから